

第一部 明星大学本『平家物語』絵本巻一の書誌と言語的特徴について

柴田雅生

一 書誌

基本的な書誌事項は、言うまでもなく巻二以降と同じである。以下、
科研報告と重複するが、巻二以降と合わせたかたちで再掲する。

紙本著色 十一帖（全十二帖のうち巻一から巻十一の計十帖、巻十二
のみ欠く）

大きさ 縦二四・四糎 横一八・五糎

外題 「平家物語 第一」（以下、巻十一まで同様）

各帖の目録には「平家物語巻第一目録」などと「第」字を入れ
て記す。

奥書 なし

表紙 濃緑地金欄緞子装

料紙 金泥下絵入鳥の子紙

装丁 列帖装

挿絵 十一帖の合計二百四十面（すべて見開きの大きさ）

時代 江戸時代前期

黒塗箱入

巻	丁数(挿絵分を含む)	挿絵数
巻第一	103	17
巻第二	119	21
巻第三	108	21
巻第四	105	21
巻第五	95	18
巻第六	81	15
巻第七	101	21
巻第八	91	24
巻第九	145	39
巻第十	111	22
巻第十一	113	21
合 計	1172	240

新出の巻一は、その大きさ（外寸）、表装や装丁、金泥による下絵入
りの料紙、本文字体、すべてが見開きの挿絵など、巻二以降と僚巻（ツ
レ）であることは疑いを容れない。以下、原則として先の報告にならう
かたちで記述してゆく。

本文は、江戸時代に古活字本や絵入り版本として流布した本文（流布
本）の系統のもので、十二巻から構成される。巻第十二を欠くのが残念

であるが、巻第一の目次と本文中の章段名は以下の通り。「付」などを付して章段名を続ける場合は次行に字下げして示す。

目録

本文中の章段名

祇園しやうしやの事	祇園しやうしやの事
殿上のやみうちの事	殿上のやみうちの事
すゝきの事	すゝきの事
付かふろ	かふろ事
我身の栄花の事	我身のゑい花の事
妓王事	きわう事
二代のきさきの事	二代のきさきの事
かくうち論の事	かくうちろんの事
きよ水ゑんしやうの事	きよ水ゑんしやうの事
てんかのり合の事	てんかのりあひ
しゝの谷の事	しゝのたにの事
う川かつせんの事	宇川かつせんの事
くはんたての事	くはんたての事
みこしふりの事	御こしふりの事
たいりゑんしやうの事	たいり炎上の事

表記に違いはあるものの章段名は巻一を通して同一と言ってよい。明暦二年版本等の流布本系統とはほぼ同じと見なせる本文も、巻一においては明暦二年版本との間に大きな異同は見られず、巻二以降に一行を超える脱落箇所（巻五に二例、巻三・七・八に各一例あり）が見られることと好対照をなしている。本絵本製作の順序は不明としか言いようがないが、

あるいは巻数順に書写したのであれば、書写を始めたばかりであるために集中力が持続した状態であったかとも考えられるかもしれない。とはいえ、次節に示すように、転写時の不注意によると見られる誤脱箇所は一定数存在する。

二 本文についての考察と言語的特徴

巻一本文の誤脱箇所については、細字による傍書補入が三箇所見られるものの、大半の脱字・衍字・誤字は補訂されず、そのままとなっている。

まず、傍書記載箇所は、以下の通り。傍書部分は「へ」に入れて、該当箇所以外は適宜漢字を当て、濁点等を施して示す「／」は改行を示し、傍書部分に関わる注記は《》内に記載した。

御さい・〈きよ〉《裁許》／なくして（巻一・八十五オ）
神人／宮司しばらくゆらへたり・〈わか〉《若》大衆悪僧共は（巻一・九十一オ）
天までも聞こえけん・〈らう〉《堅牢》地神もおどろ／き給ふらんとぞ（巻一・九十三ウ）

いずれも補入を示す小さな丸印（右の例では「・」にて示している）を本文の間に書き入れ、その右傍に記している。巻二以降には単に右傍に小字を添えるだけのものも見られる。ただ傍書補入箇所が少ないため、巻一末尾の帖に偏る傾向とともに、明確な理由があるとは断じにくい。脱字・衍字・誤字と判断される箇所は以下の通りである。

- (1) おごれる者久し／からず。
(巻一・二オ、「者」の下「も」脱か)
- (2) つか袋つけたる太刀わき／はさみて(巻一・四ウ、「る」の誤)
- (3) 諸卿／一同に祈申されければ(巻一・九オ、「訴」字の誤)
- (4) 平家の御事あしざま申者あれ／ば
(巻一・一七オ、「ま」の下「に」脱)
- (5) 文徳天皇／の御時は左ふさ右大臣の左大将
(巻一・一八ウ、「左」の下「によし」脱)
- (6) 九条殿／貞仁公の御子也。(巻一・一八ウ、「信」字の誤)
- (7) 又けんくん《教訓》し／けるは(巻一・三〇オ、「う」の誤か)
- (8) 仏御前ぞ出きる。(巻一・三十七ウ、「き」の下「た」脱)
- (9) 今にはづ／はつかしうかたはいたくこそ候へ。
(巻一・三八オ、「はつ」衍)
- (10) かくり《用里》先生(巻一・四十六ウ、「ろ」の誤)
- (11) 西へ／入御なるに(巻一・五十九ウ、「御出」の誤)
- (12) 御こしの鞅／きりはなち(巻一・六十二ウ、「う」の誤か)
- (13) 還御のぎしき《儀式》あさましき
(巻一・六十三オ、「き」の下「に」の誤)
- (14) さま／＼いのりを始めらる。
(巻一・六十六オ、「く」の下「に」脱)
- (15) 鹿の谷と云所はうしろ三井寺についで
(巻一・七十一オ、「ろ」の下「は」脱)
- (16) かへす／＼／おそろしかりし事共なり。
(巻一・七十二オ、「く」の下「も」脱か)
- (17) 坊舎一字も残さずやきはらふ。
(巻一・七十七ウ、「ず」の下「みな」脱か)
- (18) 御さいきもなかりければ
(巻一・七十九オ、「き」の下「よ」脱、《裁許》)
- (19) 江帥匡房の卿の申されし山門の大衆
(巻一・八十一オ、「し」の下「やうに」脱)
- (20) 人奇特の思ひをなして(巻一・八十四オ、「る」衍)
- (21) おぢ《伯父》のり盛《教盛》・経盛などは
(巻一・八十九ウ、「おぢ」の下「頼盛」脱)
- (22) 三塔一のせんさしや《僉議者》と聞えし
(巻一・九十一オ、「ぎ」の誤)
- (23) 先陣より後陣までもつと／＼とぞ同じける。
(巻一・九十二オ、「で」の下「みな」脱か)
- (24) なをし矢おふて供奉せらる。
(巻一・九十六ウ、「し」の下「に」脱)
- (25) 一筆書ひて大衆の中へをくらるゝ。
(巻一・九十七ウ、「ゝ」衍か)
- (26) 尾張の井戸田へ流さるゝ。(巻一・九十八ウ、「ゝ」衍か)
- (5) や(21)のように内容に関する脱落箇所がある一方、(2)(仮名「る」と「か」)や(3)「訴」と「祈」のように字形が類似したものも見える。(10)は「用」字を「角」と見誤ったためか。(6)も、「信」字の傍の部分の草体を見誤ったとすれば、同類と見なすことができよう。(12)は「う」の単純な誤写である可能性が高いが、「こし(興)」と解することもできるかもしれない。

その中でやや目立つのが、連体形終止とも捉えられる二例の(25)(26)である。流布本系の本文では「送らる」「流さる」とある部分が、文末であるにもかかわらず連体形のかたちをとっている。衍字の可能性は否定しがたいが、新たな終止形に相当するものとして、旧来の連体形が用いられたと想定することもあながち無理な話ではないと考える。

明暦版本とは異なるものの、独自本文とまでは言えないと考えられる箇所には次のものがある。

(27) 恩賞是をもかるべしとぞ。

(巻一・一十三オ、流布本諸本「とて」)

(28) 始は水干に立烏帽子白鞘巻を指いて

(巻一・一二十三オ、流布本諸本「昔」字)

(29) 又出立ける心の中こそ (巻一・一三十一オ、流布本諸本「立出」)

(30) 入道相国のちやう／なん 《長男》小松殿

(巻一・一六十八オ、流布本諸本「嫡男」)

(31) 関白殿の御格子をあけゝるに (巻一・一八十二ウ、「け」の下「ら」脱か、明暦版本以外の流布本に「あけける」とするものあり)

(32) ただ今山より取りてきたりたるやうに

(巻一・一八十二ウ、「りた」衍か)

(33) 泣く／＼本山へぞかへりける。

(巻一・一九十四オ、明暦版本「かへりのぼり」)

(28)と(30)は語義が異なるが、文脈上はさほど変わりないと判断できる。他にも文意を大きく変えるほどのものではない。

このほか、流布本系統に見られる言語的特徴として、岩井良雄氏は音

転語・略音語・約音語・音便形の四種を挙げられている(『流布本平家物語語法考』(昭和五十三年一月、笠間書院)の「第六編 俗語」の項)が、それらはそのまま明星大学本の巻一にも見られる。

一条の大路より南へおつこしてけり。(巻一・一六十八オ)

はる／＼とのぼつたりける童御子(巻一・一八十三ウ)

上卿を取てひつぱり、しやかぶり 《しゃ冠》打おとし

(巻一・一九十七ウ)

右のほかに音便形(とりわけ促音便形)は多数見え、第三例の「しゃ」をはじめとする俗語的要素が散見することも言うまでもない。